書評

市河三喜氏 服部四郎氏 共編 『世界言語概説』下巻

小林英夫

この下巻は昨年の五月の発行になっている。上巻の発行日付は昭和二十七年（一九五二）十一月だから、各巻はおよそ二ケ年半の歳月をはさんでいる。この時の間隔は両巻の記述の仕方に相当大きな変貌を与えずにはおかなかった。そのことは両巻を通じての編纂者市河三喜博士のはしがきがみずから明言している通りである。それによると本書の出版企画が立てられたのは戦争さなかの昭和十七年（一九四二）のことで、予想読者は旧制高校学生であった。上巻にしてもすでにその程度の上に出ているように見受けられるが、下巻に至っては各執筆者の間に欲が出て、いっそのことわが国の学界の最高水準を示す意気込みであたれということになり、したがって仮想読者も専門学徒ということに模様がえになってしまったらしい。上下両巻を引き比べてみると、たしかにネライの高低がはっきり目につく。

念のため上巻の結構から簡単に紹介する。編集者は市河三喜・高津春繁の両博士、この巻はもっぱら西欧語にあてられている。総論は高津氏が担当し、言語の分類法、西欧語族を述べ、終りに参考書をあげている。論じられている言語と筆者とを次に示す——

梵語（辻直四郎）、パーク語（水野弘元）、ヒンドスターニー語（井筒俊彦）、ペルシャ語（八木亀太郎）、ギリシャ語（高津春繁）、ロシア語（井桁貞敏）、ラテン語（高津）、フランス語（中平解）、イタリア語（野上素一）、スペイン語（笠井鎮夫）、ポルトガル語（星誠）、ルーマニア語（野上）、英語（大塚高信）、ドイツ語（相良守峯）、オランダ語（前島儀一郎）スエーデン語、デンマルク語、ノルウェー語（同）

これらの項目の立て方をみてもわかるように、いわゆる文明語、そしてフランス人のいう「大交通の言語」がとくに取り上げられており、文明上の価値に乏しいものは言明されていない。そうとすれば、少くとも上巻にかんする限り、ある程度啓蒙的な意図を実現しているように思われる、それにしても、とにかく選ばれた言語を、科学的に即ち言語学的に叙述することこそ啓蒙の目的に沿うことであったろう。なぜなら、私のいう意味は、科学的ということは、ただちに難解であるということにならないからである。そうした学問的レベルの点で、上巻はことにデコボコが目立つ。たとえばスペイン語・ポルトガル語・ルーマニア語などのロマン語、それから北欧諸語などの論述はお座なりの観がないでもない。

下巻は西欧語以外の言語にあてられている。編纂者は市河三喜博士のほかに服部四郎博士だ。下巻におけるこの共同編纂者の役割はユニークなものである。という意味は、たんに監修といったノミナルな役割ではなく、実質的に、大方の執筆者の原稿に目を通し、時には改稿を要求し、脱稿され

た論文にたいしてなお意見の食い違いや付加的注意のほしいもののあるときは、細目にわたって注記を施しているからだ。これは驚くべき学殖の広さと深さと、そして熱意とを要求する仕事であって、今日わが国の言語学界においてそうした仕事にあたりうる学者は、おそらく氏をおいて他にないであろう。

監督がそうだから出演者たちも張切っている様子がよくわかる。

まず服部氏の総説がゆうに一巻の書をなすだけの分量をもっており、従来の学説のたんなる紹介の域をこえて、これまでわが国ではなんぴとも手をつけたことのない「言語年代学」の方法を導入しようという極めて野心的な試みさえ見られる。

言語年代学（glottochronology）というのは、服部氏の紹介によると、アメリカの言語学者モーリス・スワデシュ（Morris Swadesh）によって創始され、ロバート・リース（Robert B. Lees）などによって発展せしめられているごく新しい言語親近性の測定法であって、これまでの言語学常識では、言語変化の速度は時代により、また言語により異ると考えられていたのにたいし、スワデシュは言語の基礎語彙（Basic Vocabulary）はほぼ一定の速度で変化することを統計学的に実証したあげく、逆に基礎語彙の統計的比較によって、同系語が祖語から分裂した年代の古さを推定しようとするものである。服部氏自身この方法をニホン語に適用してその追試に成功したと確信しているようである。

方法論のあとに、世界の言語にたいする見渡しがスケッチされている。下巻において論述されている言語族が、印欧語以外のすべてをつくしているわけではないから——アフリカや南北アメリカの大言語族がオミットされている——この総説の通読はぜひ必要である。

下巻で扱われている言語と執筆者は次のようである。——

日本語（分布、方言——金田一春彦、音韻——服部四郎、語彙、文字——林大、歴史、系統——大野晋）、琉球語（音韻体系、文法——服部、その他——金城朝永）、朝鮮語（河野六郎）、トウングース語（池上二郎）、満州語文語形態論（山本謙吉）、蒙古語（野村正良）、トルコ語（柴田武）、ハンガリー語（徳永康元）、フィンランド語（尾崎義）、アイヌ語（金田一京助）、ギリヤーク語（服部健）、シナ語（魚返善雄）、安南語（三根谷徹）、シャム語（松山納）、ビルマ語（矢崎源九郎）、チベット語（音韻、文字、参考書——北村甫、その他——渡辺照宏）、マライ・ポリネシア諸語（泉井久之助）、ヘブライ語（前田護郎）、アラビア語（井筒俊彦）

付録として日本方言区画図と世界各地の原住民の諸言語の地図とが添えられている。

ここでもまたよく名のひびいた言語を重点的にあげ、その項目下にそれと親近的な諸言語を説くという方針はとられているが、上巻よりはいわゆる土語にたいしていっそう多くの光をあてている。はしがきによると中途でいくたりか執筆者の交替がおこなわれた由であるが、結果からみてこの下巻には、上巻にまま見受けられたようなミスキャストはほとんど見られないようである。いずれもその方面の最高権威者の執筆をえているように思われる。ただ脱稿の日付が筆者ごとにまちまちであり、早目に提出したものは上巻に歩調を合しているせ

いであろう、調子のやや低いものもある。シナ語など。

各言語についてはだいたい一、名称、二、分布、三、文字、四、音韻、五、文法、六、語彙、七、歴史、八、系統、九、文例、十、参考書、のような順を追って記述されている。(すべてこれだけを具えているわけではなく、またこの順が守り通されているわけでもないが)

いま各言語の記述事項について細目の批評を加えることは、私の力にあまることだし、もしその能力があったとしてもここはその場所でもなかろう。私はただ概括的印象をしめすに止めなければならない。

もとよりこのようなばう大な企画において完全なユニフォーミティを望むことは出来ない相談だ。まして最初の企画から印刷仕上がりになるまでの時間が、生まれたての赤ん坊が小学校を終えるころまでの時間に相当するのだから、正直に期日通りに脱稿してかえって損なクジを引かされた筆者もあろう。それは充分同情に価するとして、スタイルのふぞろいの問題は、批評を受ける余地がありはしまいか。たとえば井筒氏の文章はそれ自体としてはなかなかジャーナリスティックなカンがあって読ませるが、その温度が他の筆者たちの冷静さとマッチしない。また泉井氏は南洋諸島採訪の旅の思い出を巧みに織り込んで、読者をしてさながら土民の口からじかに土語を聞きとる思いを抱かせるが、そうした随筆味はやはり不協和音をかなで立てている。せっかちな読者が所要事項を尋ねようとするとき、そうした記述法はいわば間尺に合わないのではないか。(私はその被害者としての体験からいっているのだが)

我々ニホン人にとっては妙なことではあるが、下巻に収められた多くの東洋語よりは、上巻に説かれているヨーロッパ語の方が、はるかに身近かに感じられる。早い話が、つい先ごろまで同胞であった、そして今は隣国人である朝鮮人の言語を解する人が、いったいいくたりいるだろうか。地理的接近は必ずしも精神的、つまり文化的接近ではないことを、下巻は実感せしめてくれるだろう。ニホン人はこの事実を恥じなければいけないのだ。

現実において我々の目のとどく唯一の個処は「日本語」一編だ。とくに文法や語彙の項目は素人にもいちばん歯の立つ処だろう。そんなわけで私にも、読みながらいろいろ感想をもつことができた。たとえば動詞の「変化形」を一四個所もあげ、さらに「混生形」と称してさまざまの語形をあげてあるのは、語幹形成素を無視して意味範疇に横飛びしたとしか考えられない。kakinagara を同時形、kakiticûi を進行形、kakuna を制止形とすることなど、その一例で、これらはもっと本源的な少数の基本形へと還元できたはずである。

すこし後もどりして、スタイル上の難をもう一つ付け加えれば、先輩諸学者にたいして個人的な敬称を添えるのは(先生、博士等)——ニホン文はやっかい千万で、そのため長たらしい敬訓語尾をもって調子を合わせなければならない——このような純客観的叙述を建前とする著作のなかでは好ましいことではない。これからの文体として思いきって「氏」をも含めて一切の敬称をやめてしまったらどうであろう。自然科学系の多くの論文でやっているように。

旧漢字、旧かなずかいが採られていることは、すでに言及した理由によって、ここでは責めるわけにはいかない。当然なことではあるが、索引が付けられているのは、

怠情なわが国の一般著作にかんがみて、ありがたいことだ。

内容そのものにおいては、索引をも含めて一三二九ページの大冊。わが国言語学界の総力をあげて成ったモニュメンタルな業績であることは、万人ひとしく認めるところだろう。出版者のかげの力も、もともと営利とは縁遠い事業のことゆえ、高く評価されなければならない。

ただしこの本は入門者がいきなり飛びついてこなせるようなハンドブックではない。言語学概論、最近の音声学および音韻学の基礎理論などに一通り通じていることが読者側に要求されるだろう。たとえば「モーラ」という術語についての説明を、本書は提供してはくれないのである。

（東京都新宿区神楽坂一の二研究社辞書部・昭和三十年五月発行・二二〇〇円）

――東京工業大学教授――